キャリア指導の現場から⑤

一般入試は一般にあらず

東京都立晴海総合高等学校　相談部教諭・キャリアカウンセラー
千葉吉裕

今年の大学入試は、大きく変化している。特定の高等学校だけに限定した推薦入試である指定校推薦や、AO入試の合格者が拡大している。これまでも多くの大学が高校を指定して推薦入試を行ってきたが、今年の特徴は、一般入試で多くの志願者を集めている大学も指定校推薦の枠を拡充している点である。

読売新聞が全国の大学に対しアンケート調査を行った結果を、7月8、9日の両日、全国紙の紙面数ページにわたって「大学の実力09」として発表した。その発表データの中には、多くの大学が公表に消極的であった入学試験別入学者数が含まれている。一般入試、AO入試、指定校推薦入試、公募制推薦入試、付属校・系列校からの推薦入試に分けて入学者実数を調査した。その結果、指定校推薦入試で入学した学生が全体の16・3％に達していた。公表してもらえなかった大学もあるため、実際のパーセントは、この数値よりも大きく、入学者の約20％と予想される。とすると、来春の入試では、これより増えることとなろう。このことは、大学入試を大きく変えることになると考えている。大学入試で高い入試倍率が成り立っていたのは、受験生1人当たりの出願数が多かったことによる。昨年度の1受験生の出願数は約5回であった。1回で合格してしまう指定校推薦入試などに多くの受験生が出願してしまうことは、大幅な競争倍率の低下を招くこととなる。

では、どうしてこのような事態になったのかを述べることにする。この夏、文部科学省から発表された大学・短期大学志願者数は73・5万人であった。そして、短期大学に入学した学生数は7・4万人、引き算すれば、大学志願者数は約66万人である。66万人のうち、推薦入試やAO入試で入学した学生は、まだ公表されていないが、昨年の数値をみると、26万人である。この数値は、毎年1万人程度増えていることを考えると、来春の入学試験では30万人前後の人数になるのではないかと推測する。66万人からこの30万人を引けば、一般入試志願者は、36万人。一般入試での入学者が多い国公立大学の前期日程の志願者が25万人であることを考えると、私立大学のみを一般入試で受験するものは、たった11万人程度になってしまう。今春の入学試験で日本で一番志願者を集めた早稲田大学は、1大学で12万人志願者を集めている。これらのデータから、私立大学は一般入試で第一志望の学生を集めることは大変難しいことがわかる。そこで、私立大学は一般入試まで待たずに学生を確保する方向に戦略を変えざるをえない。偏差値でブランドを作ってきた私立大学にとっては、他の入試であらかじめ入学者を確保し、一般入試の募集定員を抑えれば、一般入試で入学しにくくなり、入学者確保と偏差値上昇で一挙両得となる。このように、私立大学に入学するのは、一般入試ではなくAO入試や推薦入試が一般的となっており、そのことが今度の入試で露わになると予想するのだ。

このように書くと、大学入試センター試験志願者が約50万人もおり、欠席率だって少ないではないかと反論される。この数値には、トリックが隠されている。そのトリックとは、AO入試や推薦入試で合格している生徒に対し、高等学校が密かに、大学入試センター試験受験を課しているのである。学校長に推薦されて合格した生徒は、反発することなく、大学入試センターを受験するため、AO入試・推薦入試で入学する学生が増えているにもかかわらず、大学入試センター試験の欠席者が減少するという現象を起こしており、国公立大学志向が高まったから欠席率が下がっているわけではないことを知ってほしい。

このように入学試験の実態が変わっていることは、あまり公に語られないため、保護者や企業の人事担当者、学校関係者が混乱させられている。この機会に大学の入試の実態を理解していただき、採用や学校選択などに活かしていただければ幸いである。